

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第26集

市内遺跡発掘調査報告書(14)

宮 遺 跡 の 調 査

小 桜 館 の 調 査

谷 地 寺 遺 跡 の 調 査

他

2006年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(14)

みや 宮 遺 跡 の 調 査

こ 小 桜 館 の 調 査

や 谷 地 寺 遺 跡 の 調 査

他

平成 18 年 3 月

長井市教育委員会

序

平成 17 年度も開発事業に伴う遺跡範囲の問い合わせが多く寄せられました。内容は不動産鑑定、農地転用、宅地造成など多岐におよび、そのほとんどが民間開発工事に伴う問い合わせや届出であります。そのなかで宅地造成に伴う宮遺跡と南台遺跡の調査で大きな成果を得ることができました。

宮遺跡は市街地の中央部にあるため毎年のように試掘や発掘調査を行っており、調査報告を地図にあてはめてみると遺跡は県道寺泉舟場線に沿ったかたちで東西に広がりを持つことが明らかになってきました。その規模は東西 200 m に達する縄文時代中期の大集落と推定されます。

南台遺跡の試掘では古墳時代の土師器が出土しました。南台遺跡出土といわれる須恵器が伝わっていますが出土地点が明らかではなかったため、遺跡範囲を特定するにおいて有意義な調査といえます。また、古墳時代の集落跡は本市において初めての発見であり貴重な成果と考えられます。

年間の調査件数は 10 件程度と多いほうではありませんが、毎年行われる試掘や発掘調査も回数を重ねることで長井市の古代史に新たな発見が加えられています。これも一重に開発に携わる方々や地権者のみなさまのご理解とご協力をなくしては成り立たない事業と考えております。

最後になりましたが、本調査にご協力いただきました方々、また、厳しい天候にもかかわらず調査に参加くださいました皆様に心より感謝を申し上げます。

平成 18 年 3 月

長井市教育委員会

教育長 大滝昌利

例　　言

1. 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した、平成 17 年度の開発事業における調整並びに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査の報告書である。
2. 事業期間は平成 17 年 4 月 1 日から平成 18 年 3 月 31 日までである。
3. 調査体制は次のとおりである。

調　　査　員 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）

調査参加者 浅野義一、安達久夫、安部紀孝、小林 博、梅津良雄、齋藤勝雄、孫田長市、
中嶋 淑、山口秀吉

事　　務　局 事務局長 村上和雄（長井市教育委員会 文化生涯学習課 文化主幹）

事務局長補佐 岩崎義信（長井市教育委員会 文化生涯学習課 補佐）

事務局員 安部貴美子（長井市教育委員会 文化生涯学習課 主事）

事務局員 菊地 伸

4. 本調査を実施するにあたり、次の方々にご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。
(順不同、敬称略)
山形県教育庁社会教育課文化財保護室、平井良太郎、(株)マツキ、エヌ・ティ・ティ厚生年金基金、
渡部利幸、大泉建設(株)、四釜建設、大場孝一郎、大場栄次、長井市建設課、
また、報告書を作成するにあたり次の方々からご指導・ご助言を賜った。
(財)山形県埋蔵文化財センター、佐藤庄一、山口博之、菅原哲文、吉田江美子
5. 遺物の縮尺は土器拓影図 1/3、石器実測図 1/2 とし、挿図・付図はそれぞれスケールで示した。
6. 本書の編集・執筆・写真撮影は岩崎義信が担当し、拓本、挿図、図版の作成は菊地 伸の補助を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1	第14図 小桜館概要図	22
1. 調査の目的	1	第15図 小桜館調査概要図	23
2. 調査の方法	1	第16図 小桜館土壙断面図	24
3. 調査の経過	1	第17図 小桜館土層断面図	25
II 開発事業に係る調査	4	第18図 白山館概要図	28
1. 宮遺跡(IV次)	4	第19図 小桜館概要図	29
2. 宮遺跡(試掘)	15	第20図 南台遺跡概要図	30
3. 小桜館	22	第21図 南台遺跡出土土器	31
4. 白山館	28	第22図 谷地寺遺跡概要図	32
5. 小桜館	29	第23図 谷地寺遺跡トレンチ概要図	33
6. 南台遺跡	30	第24図 谷地寺遺跡出土遺物(1)	35
III 遺跡台帳整備に係る調査	32	第25図 谷地寺遺跡出土遺物(2)	36
7. 谷地寺遺跡	32		
報告書抄録	卷末	第1表 調査工程表	2

表 目 次

図 版 目 次

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	3
第2図 宮遺跡IV次調査概要図	4
第3図 宮遺跡IV次調査構配図	5
第4図 宮遺跡IV次調査土層断面図	5
第5図 積穴構	6
第6図 積穴構出土遺物	7
第7図 溝跡出土遺物	7
第8図 性格不明遺構・ピット	8
第9図 性格不明遺構出土遺物	9
第10図 包含層出土遺物	11
第11図 宮遺跡試掘概要図	15
第12図 宮遺跡試掘出土土器(1)	17
第13図 宮遺跡試掘出土土器(2)	18

図1版 宮遺跡IV次(1)	12
図2版 宮遺跡IV次(2)	13
図3版 宮遺跡IV次(3)	14
図4版 宮遺跡(試掘)	15
図5版 宮遺跡試掘出土土器(1)	19
図6版 宮遺跡試掘出土土器(2)	20
図7版 宮遺跡試掘出土土器(3)	21
図8版 小桜館(1)	26
図9版 小桜館(2)	27
図10版 白山館	28
図11版 小桜館	29
図12版 南台遺跡	31
図13版 谷地寺遺跡(1)	36
図14版 谷地寺遺跡(2)	37

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ現在まで216箇所の遺跡を把握しているが、近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業と、宅地造成をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はそのほとんどが表面踏査で確認したものである。そのため遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から一部試掘調査を実施し、記録として保存にあたり遺跡台帳の整備に努めた。

2. 調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施している。

(1) 現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合には現地踏査、聞き取り調査を行い遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が開発事業予定区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ恐れがあるときには坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳整備の目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲に坪掘りやトレンチ掘り、小規模な発掘調査を行い遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにし、遺跡台帳の補筆にあたる。

(3) 発掘調査

試掘調査の結果、開発工事が遺跡におよぼす影響が大きいと判断された場合は、開発工事に先立ち記録保存を目的とした発掘調査を行う。

3. 調査の経過

長井市教育委員会では、これまで行ってきた分布調査をもとに遺跡地図を作成しており、この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画される各種開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを行い、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても隨時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ態勢を組織し、同様の調査を行った。

その結果、本年度は7遺跡の調査を実施した。内訳は民間開発に係る調査が6件、遺跡台帳整備に関する調査が1件で、公共事業に係わる調査の依頼は1件が該当した。民間開発が増えつつあるのが現状である。

なお、現地調査の工程と、ヒアリングに係る調査の内容は次のとおりである。

調查工程表

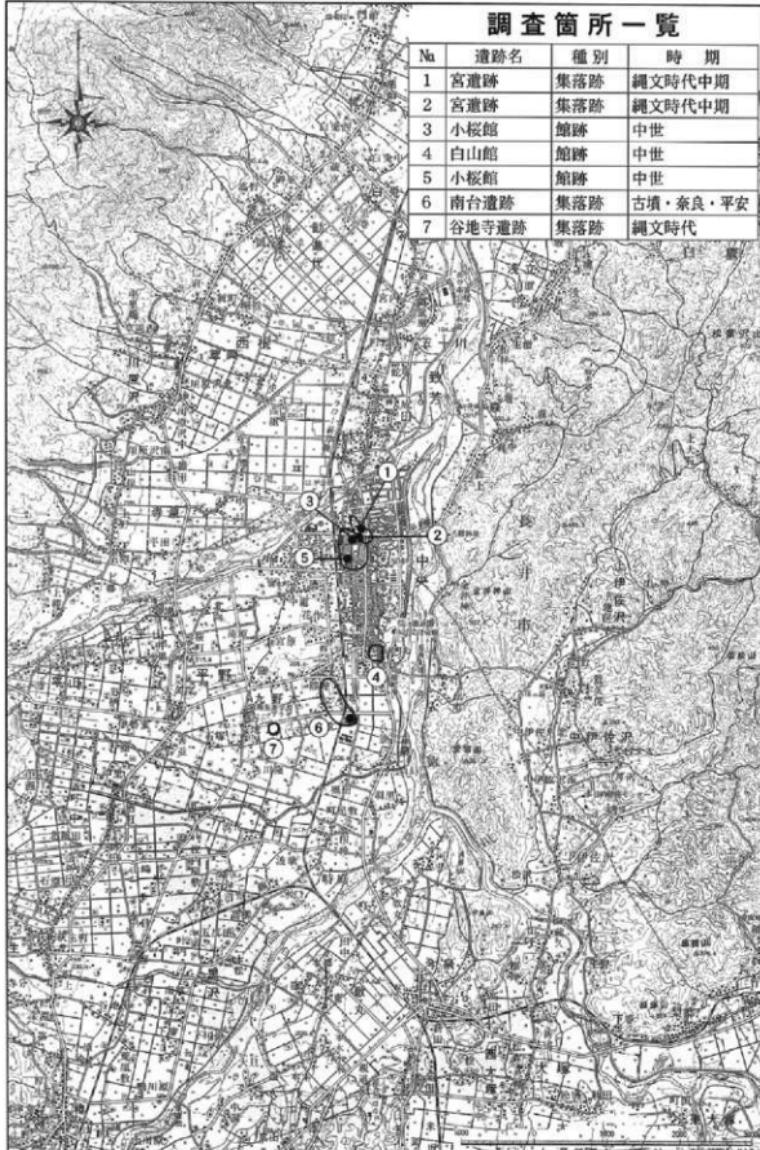
日程 内容	平成 17 年												平成 18 年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
現地踏査															
試掘調査						■			■	■	■				
発掘調査	■							■							
報告書作成									■	■	■	■			

埋蔵文化財ヒアリング一覧

事業種別	遺跡名	調査区分	種別	時期	備考
個人宅地造成に係る調査	宮遺跡	発掘調査	集落跡	縄文時代中期	民間開発
	南台遺跡	試掘調査	集落跡	古墳時代・奈良・平安	民間開発
駐車場造成に係る調査	小桜館	発掘調査	館跡	中世	民間開発
	宮遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代中期	民間開発
公園造成に係る調査	小桜館	試掘調査	館跡	中世	公共事業
地下埋設物試掘に係る調査	白山館	試掘調査	館跡	中世	民間開発
遺跡台帳整備に係る調査	谷地寺遺跡	試掘調査	集落跡	縄文時代	

調査箇所一覧

No	遺跡名	種別	時期
1	宮遺跡	集落跡	縄文時代中期
2	宮遺跡	集落跡	縄文時代中期
3	小桜館	館跡	中世
4	白山館	館跡	中世
5	小桜館	館跡	中世
6	南台遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
7	谷地寺遺跡	集落跡	縄文時代



第1図 調査箇所位置図

II 開発事業に係る調査

1. 宮遺跡（IV次調査）

所在地 長井市十日町地内

調査期間 平成17年4月11日～5月2日

起因事業 個人宅地造成

遺跡環境 長井市街地の中央部に位置し、古くから最上川の舟運で栄えたところである。本遺跡は昭和30年代に県道舟場寺泉線の造成の折、発掘調査が行われ多くの土器・石器が出土し縄文時代中期前葉から中葉にかけての代表的な遺跡として知られている。市街地の中央部にあたることから宅地造成が相次ぎ、本調査も平成16年に調整を行った事業である。

調査状況 発掘調査は開発予定区域における建物造成部を対象とし、調査面積は約160m²である。重機による表土層除去の後、手掘りで遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 穴穴造構1棟、性格不明造構2基、ピット3基、溝跡1条を検出した。また、遺物は整理箱で5箱が出土し、ほとんどが縄文中期前葉から中葉にかけての土器であった。土層堆積を見ると、地山層までが調査区南側では40～50cmに対し、中央部から北側にかけて70～80cmと深い傾向にあり、南から北にかけて傾斜した地形となっている。平成14年度において当該区域の道路を挟んだ南側で発掘調査を実施したが、本調査区と逆の土層堆積が見られた。すなわち北側（道路側）において地山層までの堆積が浅く、南側が深い堆積土となる。したがって過去の地形は現在の県道部分が微高地としてとらえられ、宮遺跡は東西に延びる自然堤防に營まれたものと推測することができる。

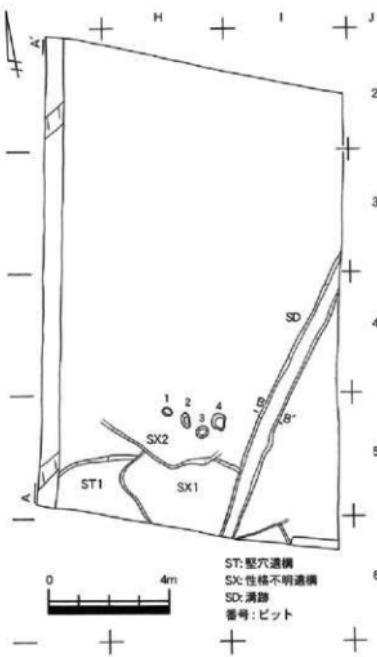


第2図 宮遺跡IV次調査概要図

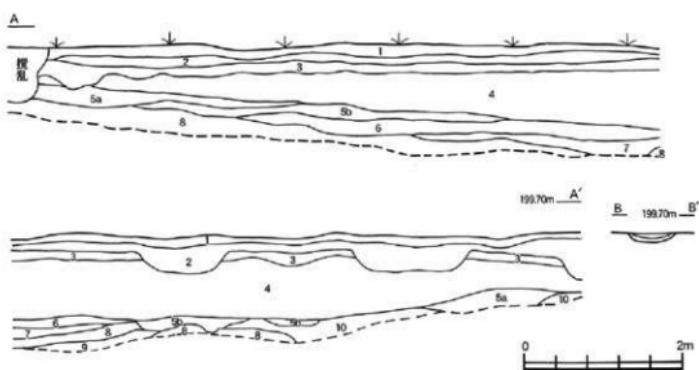
(1) 土層

調査区西壁の土層説明を行う。上層で搅乱が認められたが全体として遺存状態は良好である。南北に長い調査区中央部において地山層までの深さが1mに達し堆積土が舟底状を呈し、砂礫層も認められることから浅い谷か旧河川の存在が予想される。

- 1層 褐色砂礫 客土層
- 2層 茶褐色土 旧表土で砂粒を多く含む。
- 3層 灰茶褐色土 炭化物を多く含みしまりある土質。
- 4層 茶褐色土 炭化物、褐色粒子($\phi 2 \sim 3\text{ mm}$)を若干含みしまりある土質。縄文時代の遺物包含層である。
- 5a層 暗茶褐色土 粒子細かくしまりあり硬い土質。
- 5b層 暗茶褐色土 5a層と同質であるが灰褐色土をブロック状に含む。
- 6層 暗灰褐色土 粘質で粒子細かくしまりのある土質。
- 7層 黒褐色土 粘質で粒子細かくしまりのある泥状の土質。
- 8層 暗灰茶褐色土 砂質でしまり弱い。
- 9層 黒褐色土 8層をブロック状に含む。
- 10層 黑褐色土 粘質でしまり弱い土質。



第3図 宮遺跡IV次調査遺構配置図



第4図 宮遺跡IV次調査土層断面図

(2) 穹穴遺構 (第5・6図、図版1・2)

G～I-5・6に位置し、南側は未検出である。SD1、SX2・3と重複関係があり、SD1より古くSX2・3より新しい。平面形態や規模も不明で柱穴も未検出であるが、床面から一括土器が出土している。覆土は次のとおりである。

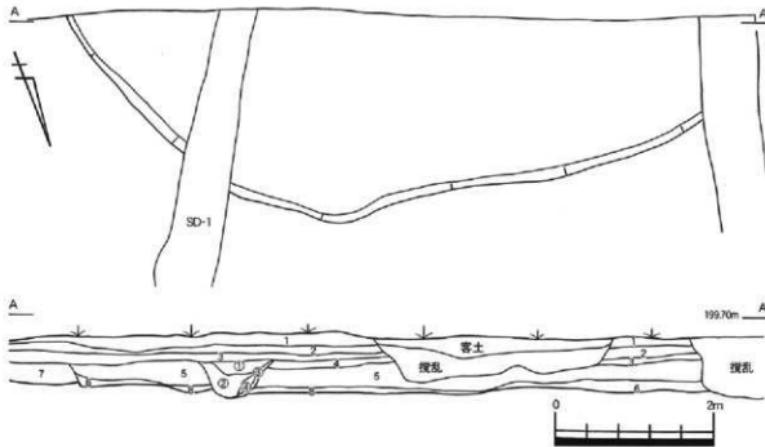
1は砂礫層の客土。2は茶褐色土で粒子の細かい旧表土層。3は灰褐色土でしまりがありかたい土質。4は暗灰褐色土でしまりがありかたい土質。5は暗灰茶褐色土で粒子が細かくしまりのある土質で、指頭大の褐色粒子と炭化物を多く含む。本層から多量の遺物が出土している。6は暗褐色土で粘性に富みしまりがありかたい土質。7は暗茶褐色土でしまりありかたい土質。8は暗灰褐色土で粘土質でしまりありかたい土質。

土 器 (第6図1～14、図版2)

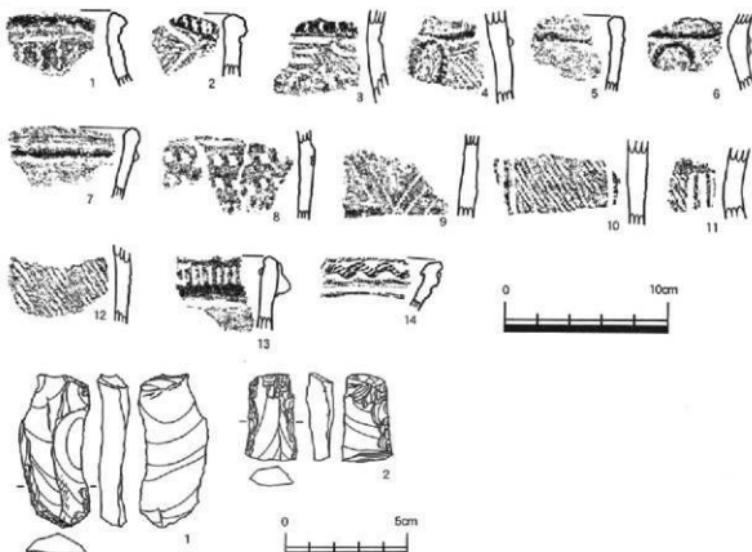
土器は覆土5から多く出土しているが土器表面の摩滅が著しい。口縁に隆帯が巡り短い縄の圧痕や刺突が施され大木7b式から8a式の特徴をもつ土器である。1は口端に隆帯が巡りその下に縄の圧痕が継位に施される。2は波状口縁の一部で、口端に縄の圧痕をもつ隆帯が施される。3は継位の縄の圧痕が帶状に巡りその下に曲線文が施される。4～7は隆帯による直線文や曲線文をもち地文に斜縄文が施される土器もある。8は半截竹管による刺突が横位に施されそれと平行して沈線も巡る土器である。7は撚糸の圧痕による幾何学文が施される。10・11は地文に縄文をもち半截竹管による直線文が描かれる土器で、12は無節の斜縄文をもつ体部破片である。13は隆帯に沿って櫛歯条の沈線文が巡り、14は口縁に波状の隆帯と横位の沈線が巡らされる土器である。

石 器 (第6図1・2、図版3)

石器は2点出土している。1は搔器で縦長剥片の先端部に剥離を施し角度のある刃部を作出し、基部には打面調整の剥離も見られる。石質は頁岩で長さ6.3cm。2は削器か籠状石器の基部で先端部を欠損する。縦長剥片を素材とし両側刃から器中央部に向けて剥離が施されている。石質は頁岩で現存値は3.5cm。



第5図 穹穴遺構



第6図 壁穴遺構出土遺物

(3) 溝跡 (第3・7図、図版1・2)

H～J-3～6に位置し、ST1、SX1と重複し本遺構が新しい。北東～南西方向に伸びる溝跡で幅60cm、深さはST1の断面において45cmを測る。本遺構から縄文土器は出土しているが時期は不明である。覆土は①暗茶褐色土、②は灰茶褐色土、③は灰褐色土、④は暗灰褐色土。遺物は縄文土器が数点出土している。1・2は斜縄文が施され1は隆帯と沈線による直線文が見られる。3・4は器壁に金雲母を多く含み他と異なった胎土の土器である。3は地文に縄文が施され縦縞文が垂下し、4は小波状の口縁部で垂下する隆帯に横位の刺突が施される土器である。いずれの土器も大木7b式から8a式の特徴をもつ土器である。

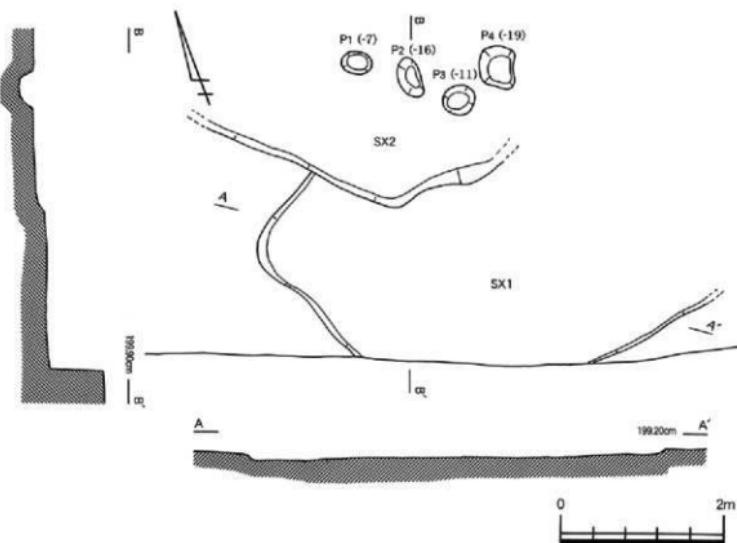


第7図 溝跡出土遺物

(4) 性格不明遺構

1号性格不明遺構 (第8・9図、図版1・2)

H・I-5・6に位置し、壁穴遺構、2号性格不明遺構、溝跡と重複し、壁穴遺構、溝跡より古く、2



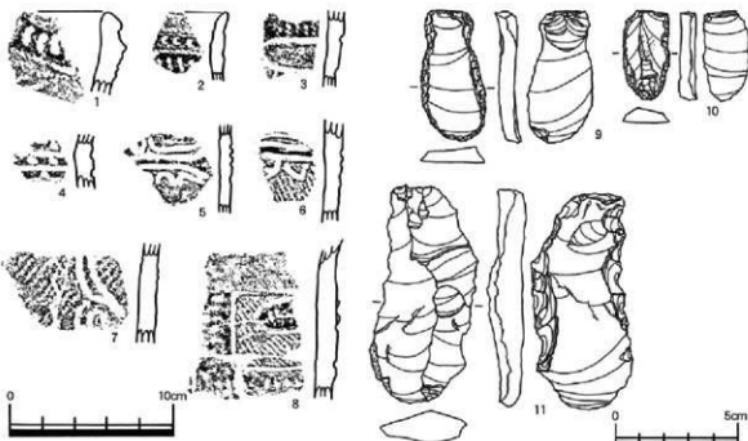
第8図 性格不明遺構・ピット

号性格不明遺構より新しい。本遺構の北東部は不明であるが、平面形は方形を呈するものと推測される。遺物は土器と石器が出土している。1は波状口縁の一部で口端に沿って縄の刺突が施され、その下位に燃糸の側面圧痕が施される。2は半截竹管による刺突と燃糸の側面圧痕が横位に施され、縦位に縄の圧痕が続く口縁部破片である。3は縦位の縄の圧痕が通り沈線による曲線文が施される。4は横位の刺突文と沈線が交互に施される土器である。5～8は沈線による曲線文が施され8には縄の刺突文も見られる。いずれも大木7b式から8a式の特徴をもつ土器である。9は先端部に角度のある刃部をもつ搔器で、器の両側面に形状を整える細かな剥離が施される。石質は頁岩で長さ5.3cm。10も先端部に角度のある刃部をもつ小型の搔器で、石質は頁岩、長さ3.7cm。11は縦長剥片の両側面に粗い剥離痕が残る石器の未製品か。石質は頁岩で長さ8.9cm。

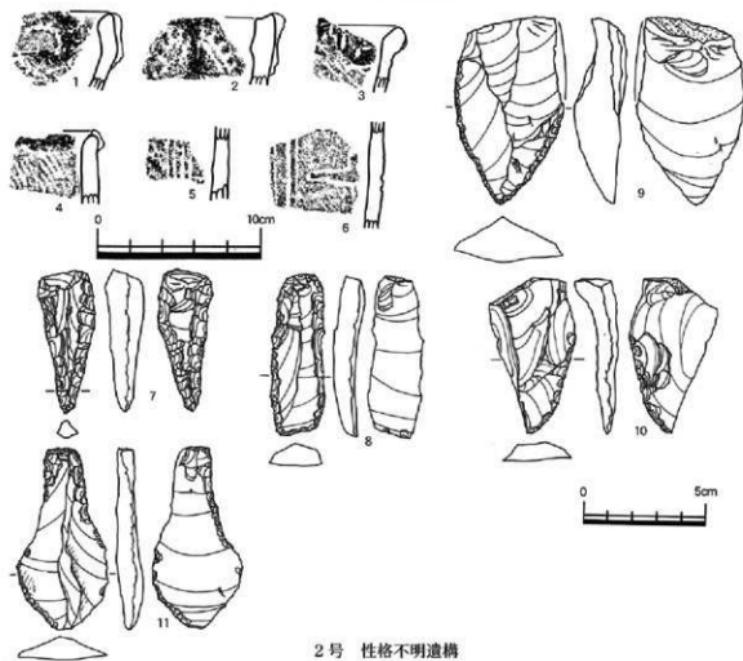
2号性格不明遺構 (第8・9図、図版1・2)

H・I-5に位置し、竪穴遺構、1号性格不明遺構と重複し、竪穴遺構、1号性格不明遺構より古い。遺構の南側が検出されたのみで、全体の形状は不明である。

遺物は土器とまとった数の石器が出土している。1は口縁に隆帯と燃糸圧痕で「の」字状の装飾が付く。2は波状口縁の端部に沿って半截竹管による刺突文と平行沈線が施され中央に隆帯が垂下する土器である。3も波状口縁の端部に沿って刺突を伴う隆帯の曲線文が施される土器。4は口縁に隆帯をもち地文に縦位回転の斜縫文が施される。5・6は半截竹管による直線・曲線文が描かれる体部破片である。7は厚みのある石錐で左右両側面から入念な剥離が加えられ、基部には素材となった剥片の打瘤が



1号 性格不明遗構



2号 性格不明遗構

第9図 性格不明遗構出土遗物

明瞭に残っている。石質は頁岩で長さ5.8cm。8は範状石器で形状を整えるための剥離が器全体に施され、背面は素材の面をそのまま残す。石質は頁岩で長さ6.6cm。9～11は頁岩を素材とした削器である。9は厚みのある剥片の両側辺に細かな剥離を加え刃部を作り出し長さ7.8cm。10は横長剥片の側辺に粗い剥離が加えられた石器で腹面には多方向からの剥離痕が残る。長さ6.3cm。11は素材となる剥片の形状をそのまま保ち、剥離は両側辺の一部に加えられた薄手の石器である。長さ7.4cm。

(5) ピット（第8図、図版1）

H-5に位置し、S X 2の底面で4基検出された。P 1は楕円形を呈し大きさは37×28cm。P 2は52×28cmで楕円形を呈する。P 3は不正円形を呈し41×38cmの規模で、P 4は51×41cmで不正円形を呈する。

(6) 包含層出土遺物

包含層から出土した遺物は整理箱で3箱を数えるが、ほとんどの土器が摩滅している。縄文中期前葉から中葉にかけての土器が大半を占め、耳栓1点、削器1点、插器1点、磨製石斧1点が出土した。

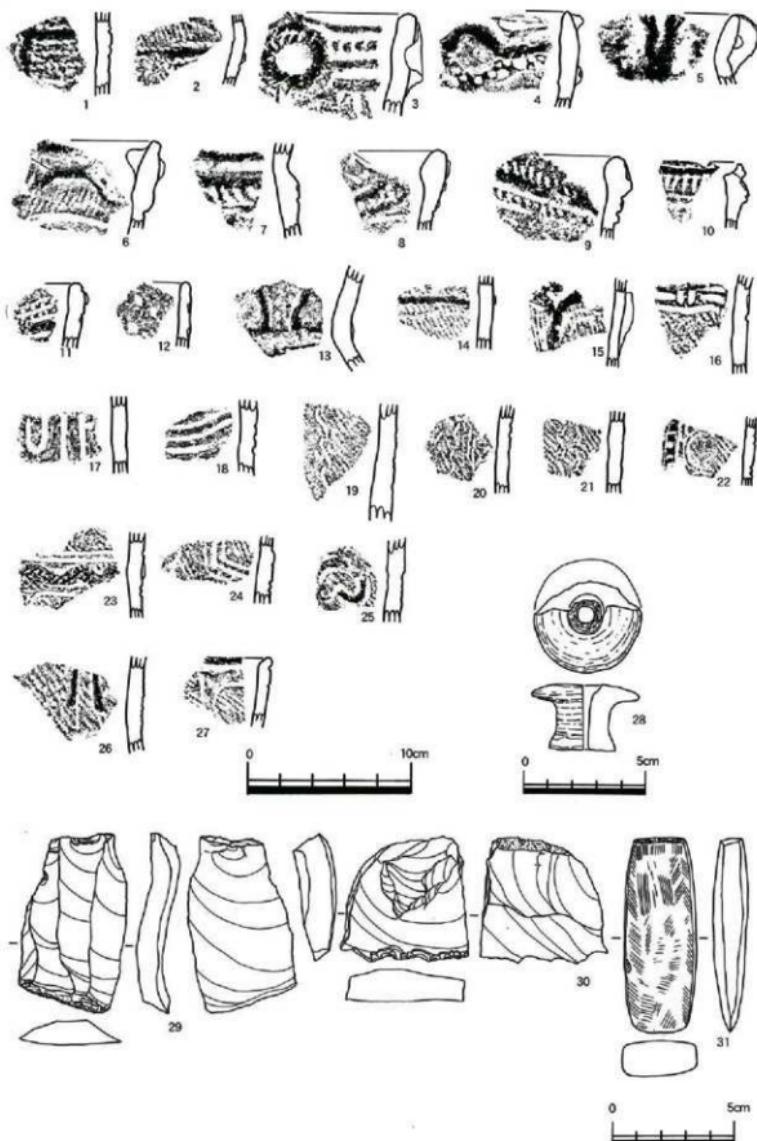
土 器 第1群土器（第10図1・2、図版3） 口縁部が隆帯や縄の側面圧痕で区画され、大木7b式に比定される土器を本群とする。1・2は隆帯と縄の側面圧痕による区画文が施された土器で、2は内溝する口縁部破片である。

第2群土器（第10図3～22、図版3） 口縁に隆帯が巡り刺突や短い縄の圧痕が施され、第1群土器と第2群土器の文様を併せもつ土器を本群とする。3・4は口縁に円形文・曲線文が施され半截竹管や棒状工具による刺突が加えられた厚手の土器である。5は口縁が「く」字状に屈曲する小波状の口縁部で橋状取手が付く。6は波状口縁の頂部破片で先端に「S」字状の隆帯が付く。7～10は沈線に沿って縦位の縄の刺突が帶状に施文された土器である。11・12は口縁に沿って帶状に刺突文が付く。棒状工具・半截竹管と施文具は多彩である。13～15は隆帯による直線・曲線文が施され、15は垂下文に沿って沈線が施文された土器である。16～18は2～3条の沈線による直線・曲線文が施される。19～21は体部に「S」字状の綾繩文が垂下し地文に斜綾文が施される土器である。22は刺突文をもつ隆帯で区画され平行沈線で曲線文が描かれる。器壁に金墨を多く含み他の土器と異なった胎土の土器である。

第3群土器（第10図23～27、図版3） 体部に沈線・隆線による曲線・渦巻・クランク状文が施文され大木8b式に比定される土器を本群とする。23は並走する平行沈線に沿って波状の隆帯文が付く土器である。24は半截竹管によるクランク状文が、26は隆線によるクランク状文が、25は隆線による曲線文が施された土器でそれぞれ地文に斜綾文をもつ。27は沈線による区画文に斜綾文が充填された土器で口縁に沿って沈線が施される。

耳 梓（第10図28、図版3） 断面が「T」字状を呈し、両端の一部を欠損する耳栓である。中央に貫通孔を有し傘の部分が丁寧に磨かれている。長さは現存値で2.7cm、幅4.4cmを測る。

石 器（第10図29～31、図版3） 29は削器で縦長剥片を素材とし両側辺に一部光沢が認められ、先端部に細かい剥離が見られる。また、両側辺と平行して走る複数の稜線、調整された打面の存在は一定の剥片剥離技術のもとで連続的に石核から打ち剥がす技法を想起させる。石質は頁岩で長さ7.3cm。30は厚手の剥片を素材とした搔器で器先端部に急角度の刃部が作出された石器である。石質は頁岩で長さ5.2cm。31は小型の磨製石斧で横断面は方形を呈し、基部と側辺に一部敲打痕が見られるが器全面に丁寧な磨り痕が残る磨製石斧である。長さ8.0cm。



第10図 包含層出土遺物



遺跡近景（北から）



左同（南から）



西壁土層断面



堅穴遺構（東から）



南壁土層断面



溝跡



性格不明遺構



一括土器出土状況

図版1 宮遺跡IV次（1）



堅穴遺構出土土器



溝跡出土土器

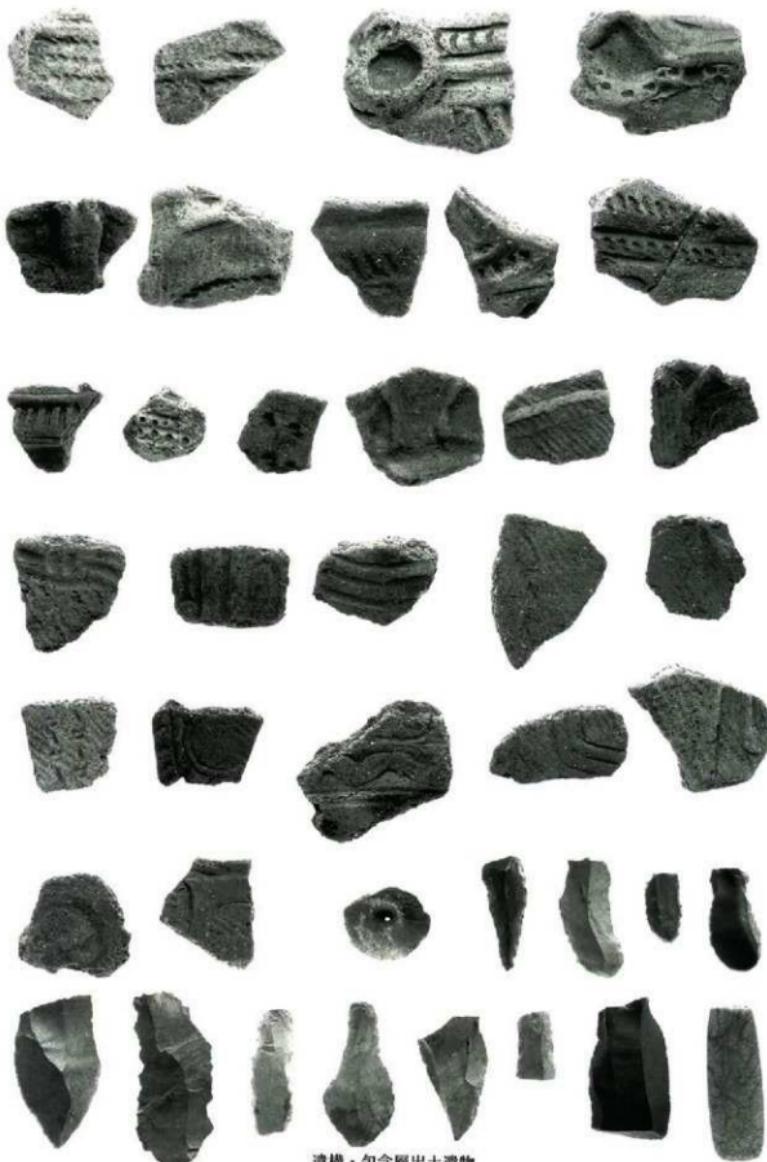


1号性格不明遺構出土土器



2号性格不明遺構出土土器

圖版2 宮遺跡IV次(2)



遺構・包含層出土遺物
圖版3 宮遺跡IV次(3)

2. 宮遺跡（試掘）

所在地 長井市十日町地内

調査期間 平成17年9月8日・9日

起因事業 駐車場造成

遺跡環境 長井市街地の中部に位置し、前項で調査を実施し南西側にあたる。

調査状況 開発予定区域に $1 \times 7\text{m}$ のトレンチを任意に3箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い造構・遺物の検出にあたった。

調査結果 現地表面下50~70cm掘り下げたところ各トレンチから多くの縄文土器が出土し、宮遺跡の範囲に含まれるものと考えられる。そのため、遺跡の保護について開発者側と協議を行ったところ、造成工事は表土の除去・客土・舗装の工程で造成されるという。遺跡におよぼす影響はきわめて少ないため慎重工事の指示とした。

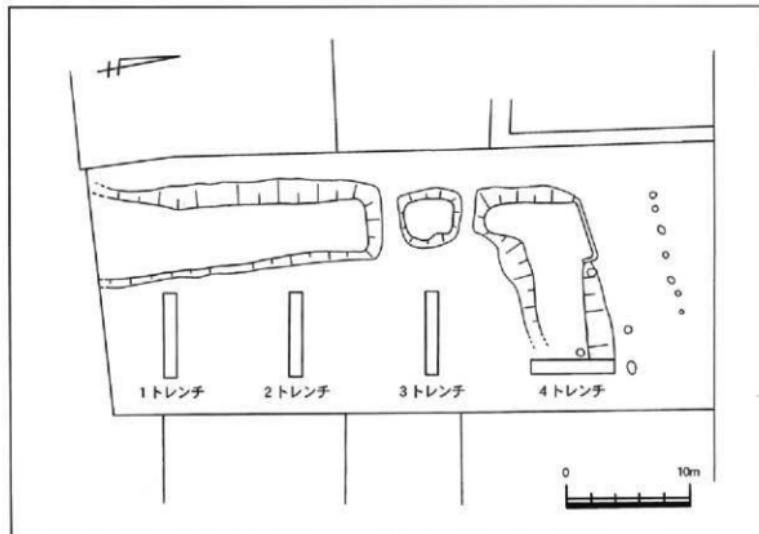
なお、まとまった土器が検出されたため次頁において出土遺物についての記載を行う。



調査区近景（上） 2トレンチ（下）



図版4 宮遺跡（試掘）



第11図 宮遺跡試掘概要図

遺物について

明確な造構は検出されていないため遺物は包含層から出土したもので、整理箱で2箱を数える。縄文時代中期前葉から中葉にかけての土器と銅片が数点出土した。

第1群土器（第12図1～7、第13図32、図版5・6）

口縁部が隆帯や縄の側面圧痕および沈線で区画され、大木7b式に比定される土器を本群とする。

1・2・5は隆帯と撚糸の側面圧痕で曲線文が施される土器で、1は波状口縁の深鉢、2・5は口縁が内湾する鉢又は深鉢であろう。3は撚糸の側面圧痕で幾何学文が施される土器である。4・7は口縁に沿って波状に隆帯が巡らされ、その下に風字の撚り糸圧痕が二重に施文される。7は縦位の縄の圧痕がめぐる。6は波状口縁の一部で隆帯と沈線による区画文が施され、器形は大型の深鉢であろう。32は「く」字に屈曲した口縁に橋状取手が付き隆帯の区画文をもつ土器である。

第2群土器（第12図8～31、第13図36、図版5・6）

口縁に隆帯が巡り刺突や短い縄の圧痕が施され、第1群土器と第2群土器の特徴を併せもつ土器を本群とする。

8は隆帯の区画文をもつ波状口縁で口端と隆帯に刺突が施されている。9・10、13～15、17・18・20・21は隆帯や沈線による区画文に沿って短い縄の刺突文が施される土器で、11・12・16・19は隆帯が巡り12は沈線区画文に縦位沈線が充填され、22～25は体部に綾縞文が垂下する土器である。26～31は沈線による円形文・曲線文・直線文が描かれ、31は体部が屈曲する。36は縦位の刺突と隆帯が口縁を巡る土器である。

第3群土器（第13図33～35・37～49、図版5・6）

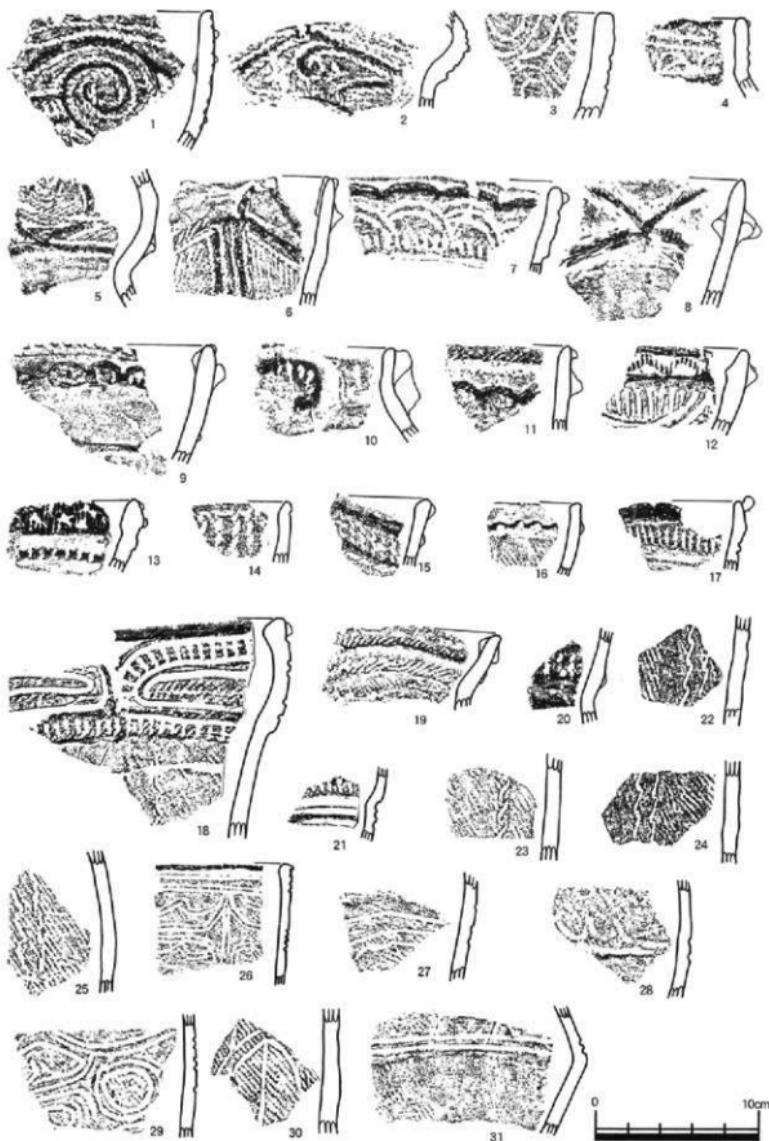
口縁に刺突を伴う隆帯をもち交互刺突や刺突文が巡り、体部には沈線・隆線による曲線・渦巻・クラシク状文が施され大木8a式に比定される土器を本群とする。

33は口端が小波状を呈する。「く」字状に屈曲する口縁の下位に沈線・撚糸の側面圧痕・交互刺突文が巡り、体部には綾縞文が垂下する小型の鉢である。34は口縁が外反ぎみに立ち上がる深鉢である。隆帯による橋状取手が付き、口縁に縦位の刺突文と交互刺突文が巡る。体部には地文の斜状文が施され沈線によるクラシク状文が描かれた土器である。35は口縁が外反ぎみに立ち上がり縦位の刺突文が巡り、隆帯による突起が付く。口縁には縦位の短い縄の側面圧痕と2条の沈線が巡り、体部には沈線によるクラシク状文・曲線文画描かれた深鉢土器である。37・38・42・43は交互刺突と沈線のクラシク状文、39～41・45・49は沈線のクラシク状文・曲線文が描出された土器である。46は隆線と沈線、47・48は隆線で曲線文が描出された土器である。44は波状の隆線と刺突文が巡る。

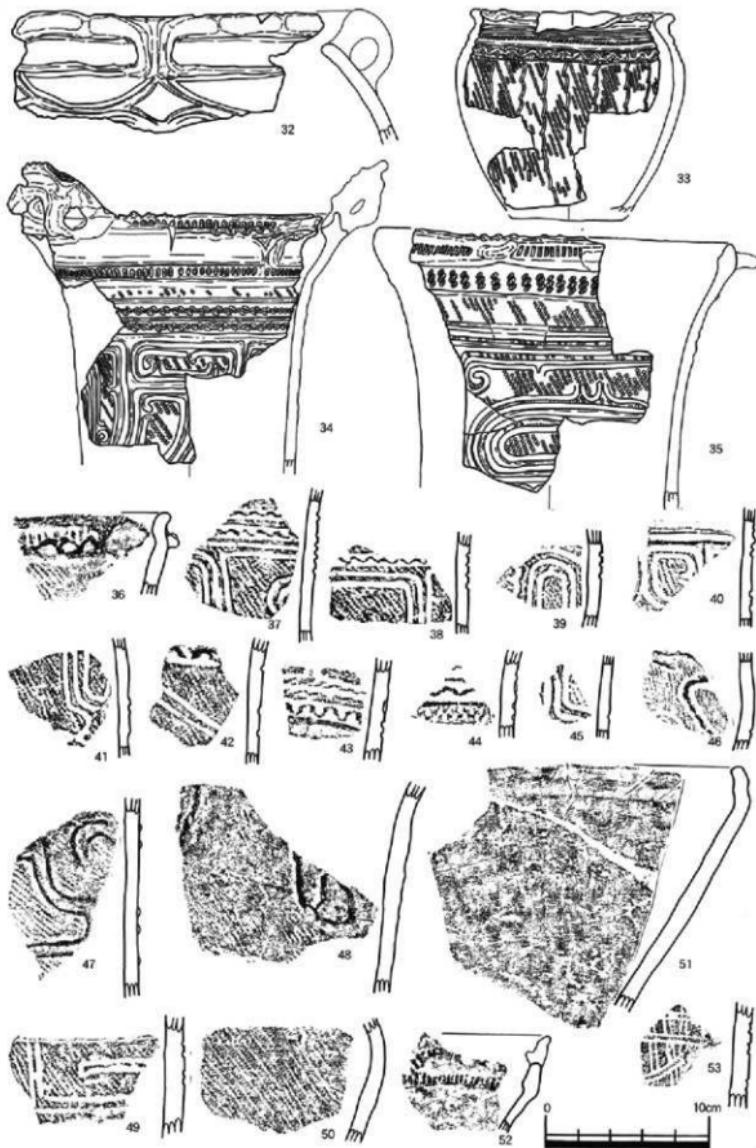
第4群土器（第13図50～53、図版7）

第1群から第3群に伴う縄文時代中期前葉から中葉にかけての土器を本群とする。

50は体部が内湾する鉢、51は口縁に浅く幅広の沈線が巡る大型で文様を持たない浅鉢である。52は口縁に小突起が付く土器で口端は指頭による小波状を呈する。口縁に沿って細い縦位の刺突文をもつ隆帯が巡る。器壁は黒褐色を呈し胎土も緻密でかたく当地方の土器と比較すると異質の感じのする土器である。53は半截竹管による沈線が縦位・横位・斜位に施された土器で、胎土や焼成は当該地方の土器と同質であるが、文様が特徴的である。



第12図 宮遺跡試掘出土土器(1)



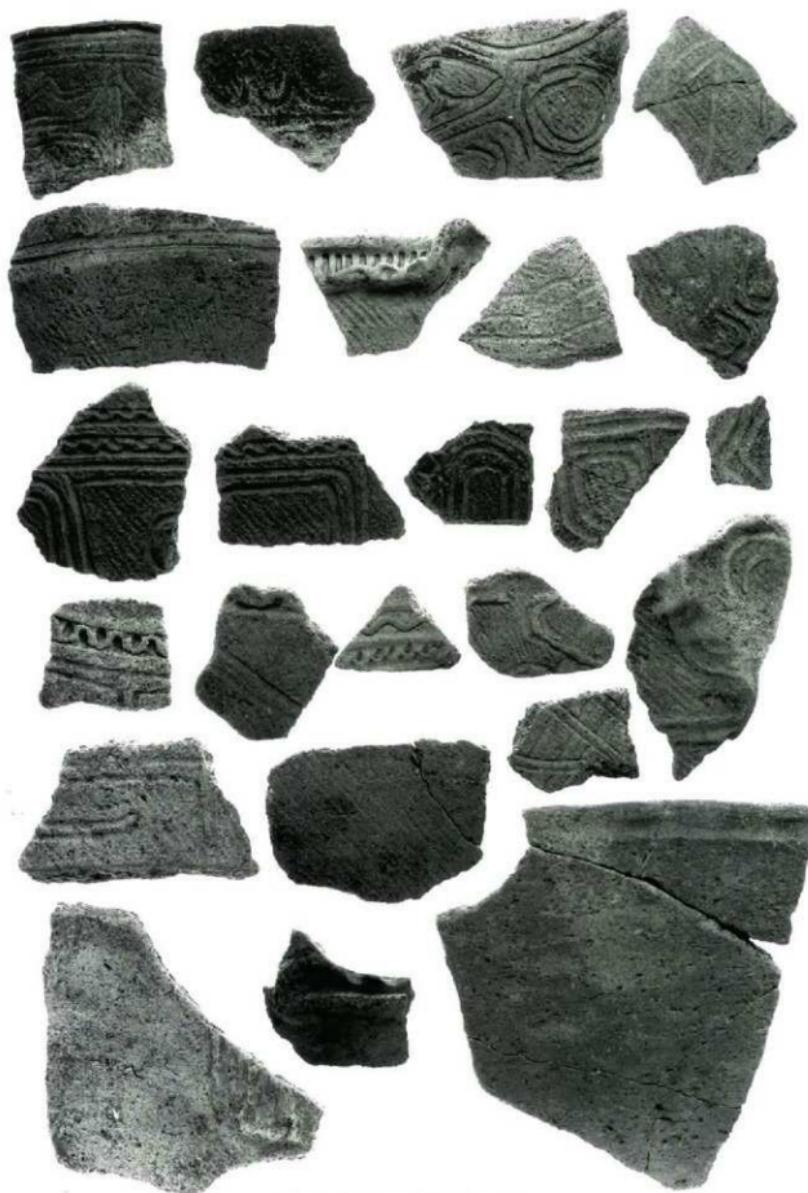
第13図 宮遺跡試掘出土土器(2)



図版 5 宮遺跡試掘出土土器 (1)



図版 6 宮遺跡試掘出土土器 (2)



图版 7 宫遗址试掘出土土器 (3)

3. 小桜館

所在地 長井市十日町地内

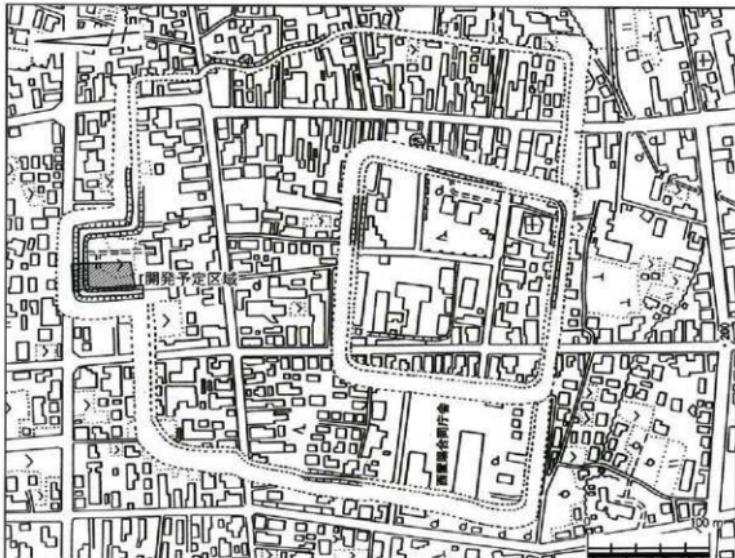
調査期間 平成17年11月10日～25日

起因事業 駐車場造成

遺跡環境 長井市街地の中央部に位置し、小桜館の北縁部にあたる区域である。別名宮村館・卯の花の館と称され、その中核部は現在の旧西置賜郡役所周辺とする見方があり、戦国時代の伊達の家臣片倉一族の居館といわれている。現況は宅地や商店街がたちならび市街地化しているが、住宅の境や庭のかたすみに土塁の一部が現存し当時の面影を垣間見ることができる。

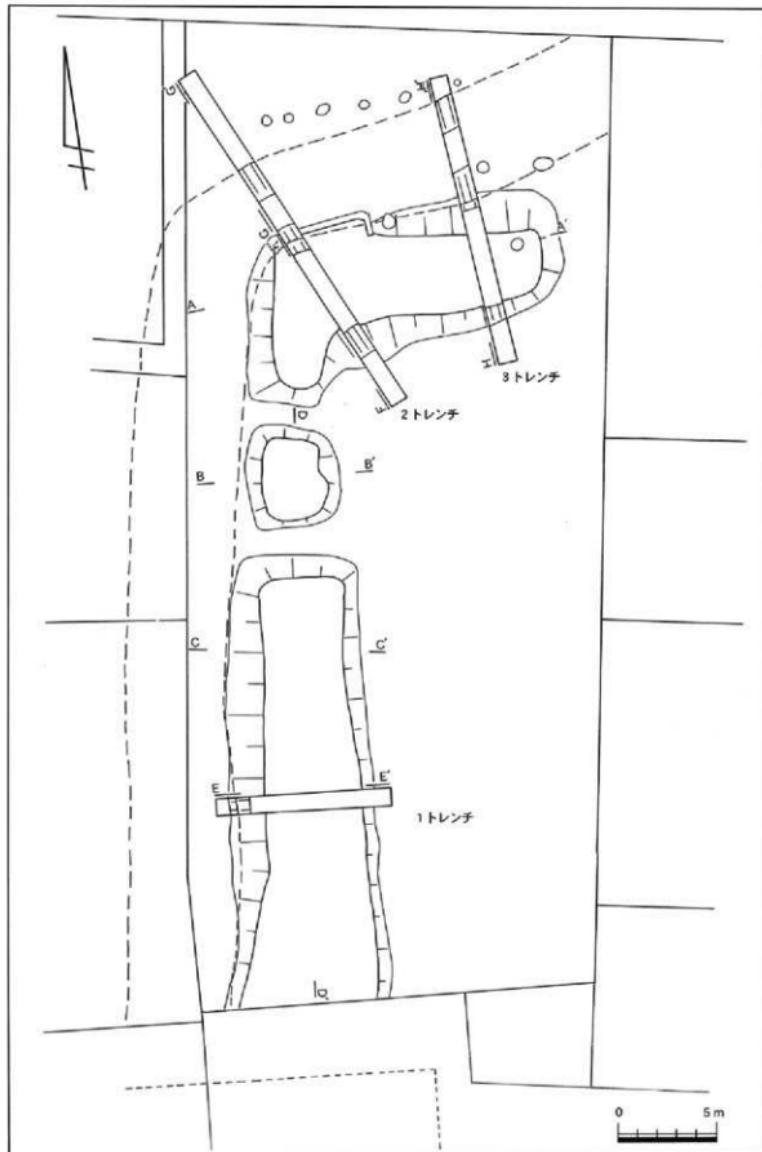
調査状況 開発予定区域に残る土塁の平面実測およびレベル実測を行い、土塁・堀跡に幅1m長さ6～20mのトレンチを任意に3箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げを行い土層断面図の作成と旧堀跡の検出にあたった。

調査結果 調査区北と西侧で土塁と堀跡を確認した。土塁は北東隅が周囲より一段高く、そこには稲荷堂が建ち屋敷神として祭られている。堀は現況では確認できないが、昭和20～30年代頃まで残っており水も溜まっていたがその後埋められたという。トレンチの断面観察から堀の幅は約5.4mを測り所謂「三間堀」というものであろうか。深さは現地表面下1～1.3mである。堀の覆土からガラス片や現代の陶磁器片が多く出土した。調査区の南西部において長さ5m、高さ2m、上底1.4m、下底4mの断面が台形状を呈する土砂の高まりを確認した。平成7年の中世城館遺跡調査報告の土塁の位置とは異なっており、これが土塁になるかは今後の調査に委ねることとする。



第14図 小桜館概要図

作図：竹田市太郎
1995年、山形県中世城館遺跡調査報告書第1集
山形県教育委員会編集より



第15図 小桜館調査概要図

土壌について

現存する土壌に3箇所のトレンチを設定し掘りさげながら土壌断面の精査とレベル実測を行った。E-E'で堀跡と土壌を、F-F'で土壌を、G-G'で堀跡を、H-H'で堀跡と土壌をそれぞれ確認することができた。土壌断面の詳細は次のとおりである。

E-E'

1 a 竹根を多量に含みしまり弱い。1 b 暗褐色土 1 a と同質で竹根を多く含み炭化物を多く含む。1 c 暗褐色土 1 a と同質でしまりあり。2 茶褐色土。3 灰褐色土。4 褐色土。5 暗褐色土。6 暗茶褐色土。7 暗褐色土 粘質で粒子細かい。8 暗灰褐色土 堀底の堆積土。9 暗褐色土 しまり弱い。10 暗灰褐色土 粘質でしまり弱い。11 暗灰褐色土 褐色土をレンズ状に含む。12 暗褐色土 粘質でしまり弱い。13 黒褐色土 粘質でしまり弱い。14 暗褐色土 15 暗茶褐色土 茶褐色土を霜降り状に含む。16 灰茶褐色土 しまり弱く繊を多く含む。17 灰褐色土 粒子細かく小繊を多く含む。18 暗灰褐色土 粘質でしまりある。19 暗茶褐色土 褐色土をブロック状に含む。20 茶褐色土。21 暗茶褐色土。22 暗褐色土。23 黄灰褐色土。24 暗茶褐色土。25 黑褐色土。26 茶褐色土。褐色土をブロック状に含む。27 灰褐色土 地山層

F-F'

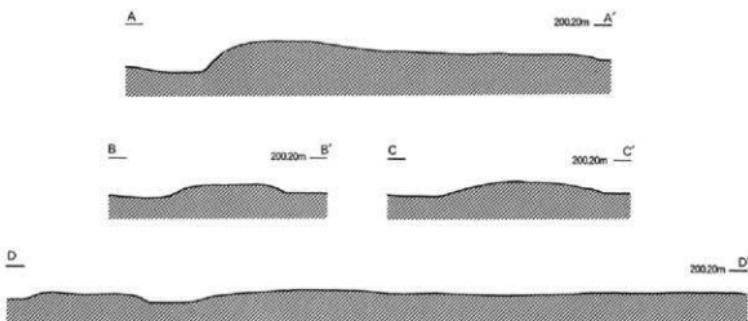
1 褐色土 客土。2 暗褐色土 粘質土。3 暗茶褐色土。4 黑茶褐色土。5 灰茶褐色土 粘質でしまり弱い。6 暗褐色土 粘性を帯びる。7 暗褐色土。8 褐色砂質土。9 暗茶褐色土 粒子細かくしまりある。10 暗灰褐色土 小繊を若干含む。11 茶褐色土 小繊を含む砂質土。12 黑褐色土。13a 茶褐色土 黑褐色土をブロック状に含む。13b 粒子細かくしまり弱い。13c 13a と同質であるがしまりある。13d 明るい色調。14 暗茶褐色土。15 暗茶褐色土 粘質でしまりあり。16 灰褐色土。17 暗茶褐色土 しまり弱い。18 灰褐色土 しまりありかたい。19 灰茶褐色土。20 茶褐色土。21 明茶褐色土。

G-G'

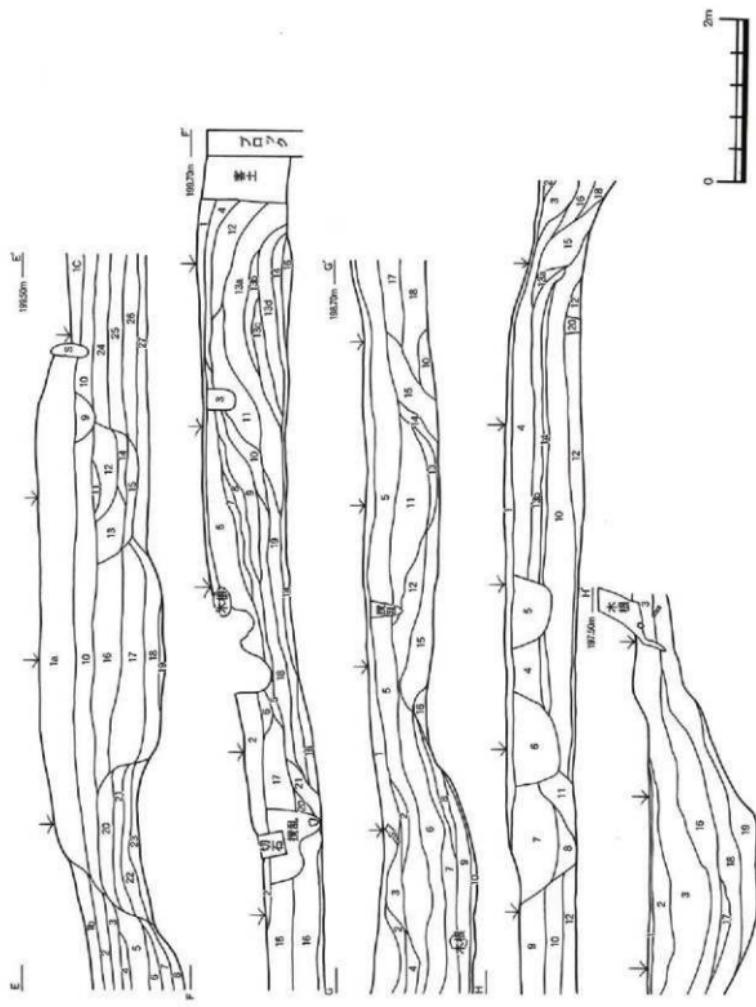
1 暗褐色土。2 黑褐色土。3 褐色土。4 砂層。5 暗茶褐色土 粘質で小繊やビニールを含む。6 暗褐色土 粘質でしまりありかたい。7 暗茶褐色土。8 褐色砂礫層。9 黑褐色土。10 褐色砂層。11 暗褐色土 粘質でしまり弱い。12 茶褐色土 粘質でしまり弱い。13 褐色砂礫層。14 灰褐色土。15 灰茶褐色土。16 灰褐色土 しまりある砂質土。17 茶褐色土 小繊を若干含みしまりある。18 暗褐色土。

H-H'

1 黑褐色土。2 暗褐色土 小繊を多く含みしまりある。3 灰茶褐色土 褐色粘質土をブロック状に含みしまりあり。4 暗褐色土 小繊を若干含みしまり弱い。5 茶褐色土 粒子細かくしまり弱い。6 灰褐色土 砂粒を若干含みしまり弱い。7 暗茶褐色土 褐色粒子を若干含む。8 暗茶褐色土 粘質でしまり弱い。9 暗茶褐色土 粘質でしまりある。10 暗褐色土 (縄文時代の包含層)。11 黑褐色土。12 灰褐色土 地山層。13a 青灰褐色土 しまりある。13b 粘質でしまりありかたい。暗14青灰褐色土 非常にかたい土質。15 茶褐色土。16 灰褐色土 小繊、風化花崗岩を含む。17 暗褐色土 燃土、炭化物を含む。18 灰茶褐色土 小繊を多く含む。19 黑褐色土。20 暗褐色土 縄文時代遺構の覆土



第16図 小桜館土壌断面図



第17図 小桜館土層断面図



遺跡近景（北から）



1 レンチ



左同 土層断面



2 レンチ



土層断面

図版8 小桜館（1）



遺跡近景（南から）



2 レンチ



左同 土層断面



3 レンチ



右同 土層断面

図版9 小桜館（2）

4. 白山館

所在地 長井市館町北地内

調査期間 平成17年11月30日

起因事業 埋蔵物調査 地下埋設物試掘調査

遺跡環境 長井市街地の中央部に位置し、地名が示すように戦国期の館跡に係る土壘の一部が現存する。遺跡西側の土壘の遺存状況は良好で、特に南西隅の土壘は高さ3mに達する。この土壘に沿って掘りも存在したが埋め立てられ駐車場となつており、当該開発区域は遺跡の西側にあたる。調査状況 開発予定区域に1×30mのトレンチを任意に3箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあつた。

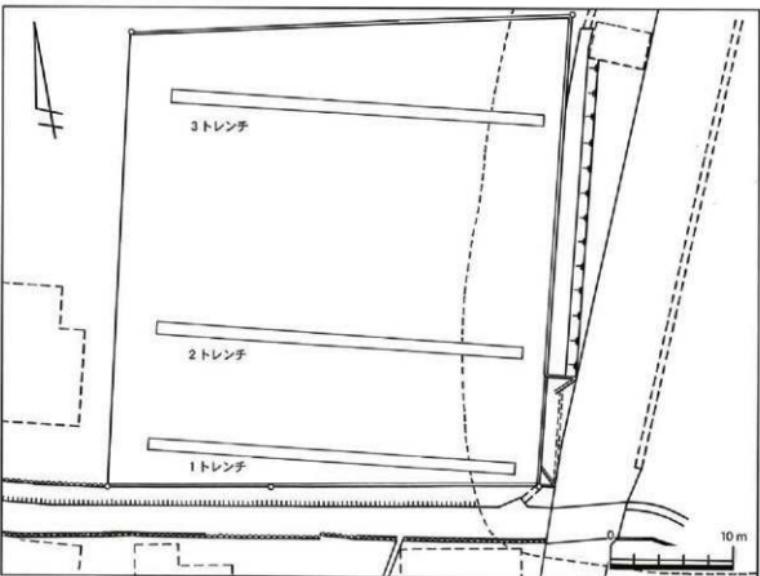
調査結果 地山層まで100~120cmの深さで、構築物の基礎による擾乱が多く見られ、遺構・遺物は検出されなかつた。本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。



遺跡近景（上） 3トレンチ（下）



図版10 白山館



第18図 白山館概要図

5. 小桜館

所在地 長井市高野町内

調査期間 平成17年12月5日

起因事業 公園造成

遺跡環境 長井市街地の中心部、旧西置賜郡役所の所在する場所である。前項の調査地点から南西に約100mの位置にあり、館跡の中核部と目される区域にあたる。明治時代以降、郡役所や地方事務所に係る建造物が建てられていた。

調査状況 開発予定区域に1×15mのトレンチを任意に3箇所設定し、地山層まで重機を用いて掘り下げを行い造構・遺物の検出にあたった。

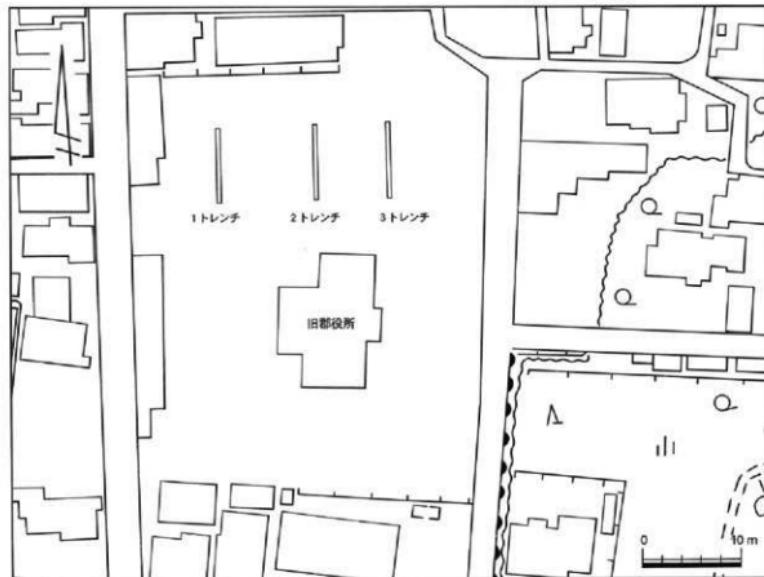
調査結果 地山層まで50~80cmの深さであったが構築物の基礎や土台による擾乱が著しく見られ、造構・遺物は検出されなかった。本造工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。



遺跡近景（上） 3トレンチ（下）



図版 11 小桜館



第19図 小桜館概要図

6. 南台遺跡

所在地 長井市台町地内

調査期間 平成18年2月14日

起因事業 個人宅地造成

遺跡環境 長井市街地の南西部、南北に延びる最上川の河岸段丘上に位置し、遺跡のすぐ西側を山形鉄道フラー長井線が通っている。南台遺跡から出土しといわれる重ね焼き状態の須恵器が伝わっているが明確な出土地点は不明である。また、平成12年に大規模宅地造成に伴い緊急発掘調査が行われ近世前半の集落跡が発見され、その中に9世紀代の須恵器や堅穴住居跡が単発的に検出されたが広範囲におよぶ本遺跡の時期や性格は明らかではない。

調査状況 開発予定区域に16×6mのトレンチ任意に2箇所設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。また、周辺地域の方々から当該遺跡の出土品について聞き取り調査を行い情報集にあたった。

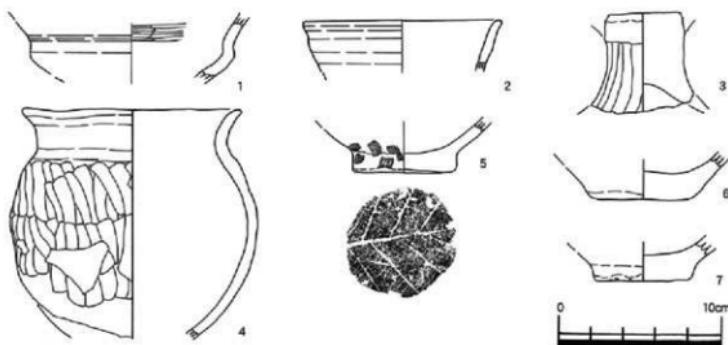
調査結果 1トレンチでは現地表面下40~50cmで褐色の地山層に達するが、畑地であり搅乱が著しく遺構・遺物は検出されなかった。2トレンチでは西側端部において遺構プランを検出し土師器が出土した。しかし、他は1トレンチ同様に搅乱が著しく遺構・遺物は検出されず、聞き取り調査においても遺物の出土は当該調査区の西側であるという。これらのことからこの度の開発予定区域は南台遺跡の東端と考えられ、本造成工事が遺跡におよぼす影響はきわめて少ないものと考えられる。



第20図 南台遺跡概要図

遺物について

壺、高壺、甕、長胴甕が出土した。1・2は壺で、1は口辺が外反し体部との境に段をもち、2は口辺が外傾する壺で内側が黒色処理されている。3は高壺の脚部で中空度が少ない短めの脚である。4は甕で口辺が「く」字状に外反し、球形の体部である。5～7は甕の底部で器形は不明であるが5の底部には木葉痕が付いている。これらの土器は古墳時代後期の6世紀代に比定される。



第21図 南台遺跡出土土器



遺跡近景（北から）

2 トレンチ

出土遺物

出土遺物

図版12 南台遺跡

III 遺跡台帳整備に係る調査

7. 谷地寺遺跡

所在地 長井市九野本地内

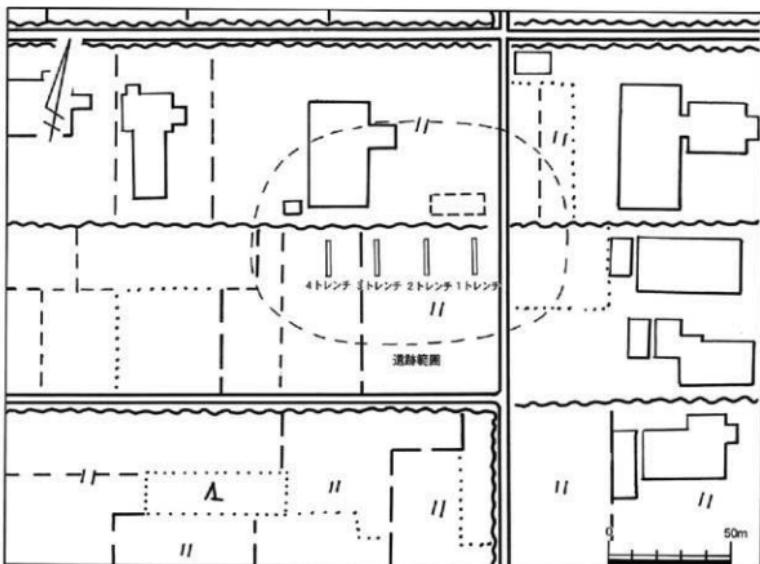
調査期間 平成17年12月27日

起因事業 遺跡台帳整備

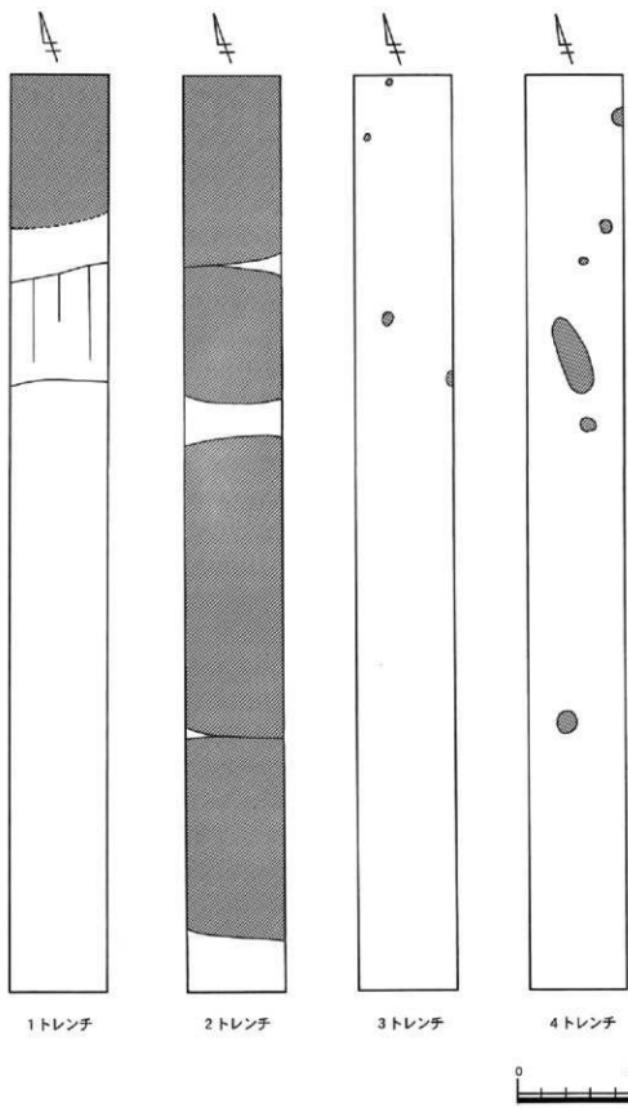
遺跡環境 長井市街地の南西部の田園地帯に位置し、近くに置賜生涯学習プラザをはじめ工場や事業所の進出が相次いでいる。本遺跡の東約300mには平安時代の小山遺跡のほか、北西には縄文時代後期の注口土器が出土した登ノ越遺跡がある。

調査状況 平成16年に関係機関から寄せられた情報がもとで発見された遺跡である。調査区域に幅1.6m長さ15mのトレンチを任意に4箇所設定し、重機を用いた地山層まで掘り下げを行い遺構・遺物の検出にあたった。また、地権者の方から聞き取り調査を行い遺跡の情報収集にあたった。

調査結果 すべてのトレンチから遺構・遺物が検出された。また、各トレンチとも地山層までの堆積土が20~30cmと浅く、耕作土直下において遺構・遺物を検出した。1トレンチでは北側で多くの縄文土器が出土した他、中央部において溝状の落込みが検出され須恵器が若干出土した。2・3トレンチでは多量の縄文土器が出土し、北側において黒褐色土の遺構プランを確認した。4トレンチではピットが検出され須恵器片が若干出土している。本遺跡から東側にかけて小山遺跡・南台遺跡・堀切遺跡と東西方向に沿って遺跡が帶状に連なりを見せる。縄文時代・古墳時代・平安時代と時期はまちまちであるが、自然堤防上に営まれた集落跡と推測され、本市の平野部における遺跡の立地として注目したい存在である。



第22図 谷地寺遺跡概要図



第23図 谷地寺遺跡トレンチ概要図

遺物について

遺物はトレンチから出土したもので整理箱で3箱を数える。ほとんどが縄文時代の土器と石器で、一部平安時代の須恵器も出土した。遺物は包含層までの深さが浅いため耕作を受けており、縄文土器は摩滅したものが多く、須恵器は小破片であった。

縄文時代

土 器

第1群土器（第24図1～7、図版14）

沈線および微隆起線による曲線で文様を区画し、大木10式に比定される土器を本群とする。1・4・7は縄文施文部を沈線および微隆起線による曲線で文様を区画した土器である。1は内湾ぎみに立ち上がりをもつ口縁部である。2・3・5・6は縄文施文部を沈線による曲線で文様を区画した土器である。6は2条の沈線で区画文を形成する。

第2群土器（第24図8～25、図版14）

複数の沈線で文様を区画し縄文が施文されるものと、集合沈線で文様が描出される土器で、縄文時代後期初頭に比定される土器を本群とする。8は沈線区画文の上に円形の刺突をもち、9は口縁が小波状を呈し沈線区画文のなかに半截竹管による刺突が施される土器である。11は「く」字状に屈曲する口縁に隆起で渦巻状の装飾が付き、沈線の区画文が施され、12は「く」字状に屈曲する体部で3条の沈線で区画文が描出される土器である。13～18、23～25は2～3の沈線で区画文が描出される土器で、23・24は円形文が描かれ、13は外反りする器形をもつ土器である。19～22は集合沈線による文様が施される土器で、19・20の文様は櫛齒状の施文具で描かれたものであろう。

第3群土器（第24図26～44、図版14）

第1群土器および第2群土器と平行関係にあり、縄文中期末から後期初頭に位置づけられる土器を本群とする。26～28は平行沈線で直線的な文様が施された土器である。29～38は器面に無数の燃糸文が施された土器で単軸絡条体第1類に分類される。29～36は燃糸が密で37～39の燃糸は疎で施文回数の違いから生じたものであろう。40～43は斜縄文が施文された粗製土器で、44は網代痕が残る底部破片である。

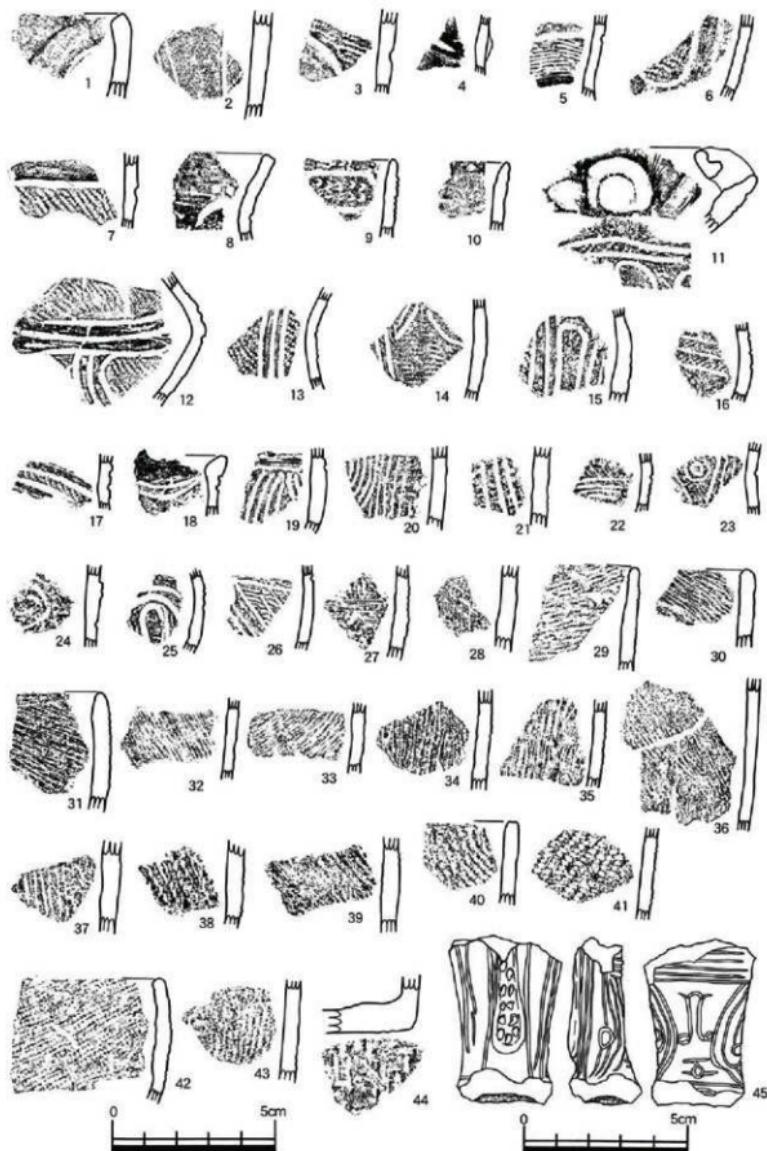
土 偶（第24図45、図版13）

板状を呈する体部で頭部および脚部は欠損する。腹部にやや膨らみをもち刺突文が縦位に施文され、側面にかけて上下方向に沈線が施される。背部には両側面から引かれた曲線文が弧状に描かれ、背中中央に円形文基調とする曲線が描出される。また、背上位には数条の沈線が横位に施される。底部は座んだ形態を呈しており脚部を省略した土偶であろうか。現存高5.3cm。

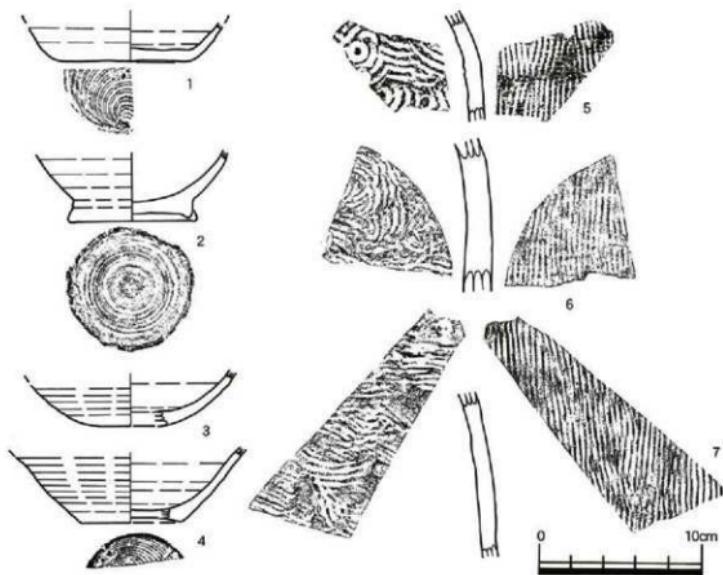
平安時代

須恵器（第25図1～7、図版14）

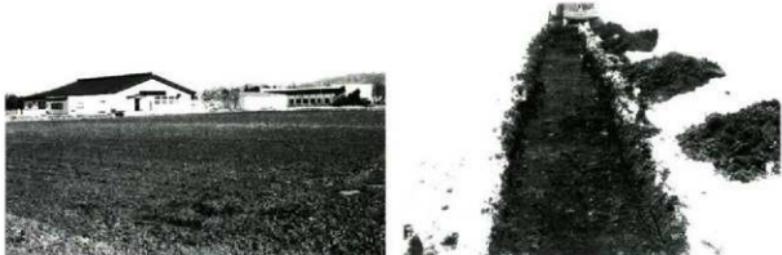
1・3・4は須恵器壺で、1・3の底部付近はやや丸みを帯びた器形を呈する。4の体部下位には墨書きが見られ残存する書体から「四」・「目」・「皿」の文字が想定される。2は高台壺で底部は籠状工具による調整痕が残り、底径の大きい土器である。4は底径が比較的小さな壺で器壁が開きぎみに立ち上がりを見せる。5～7は壺の体部で画面に印痕が残る。9世紀中葉から後葉に比定される。



第24図 谷地寺遺跡出土遺物(1)



第25図 谷地寺遺跡出土遺物（2）



遺跡近景（南西から）

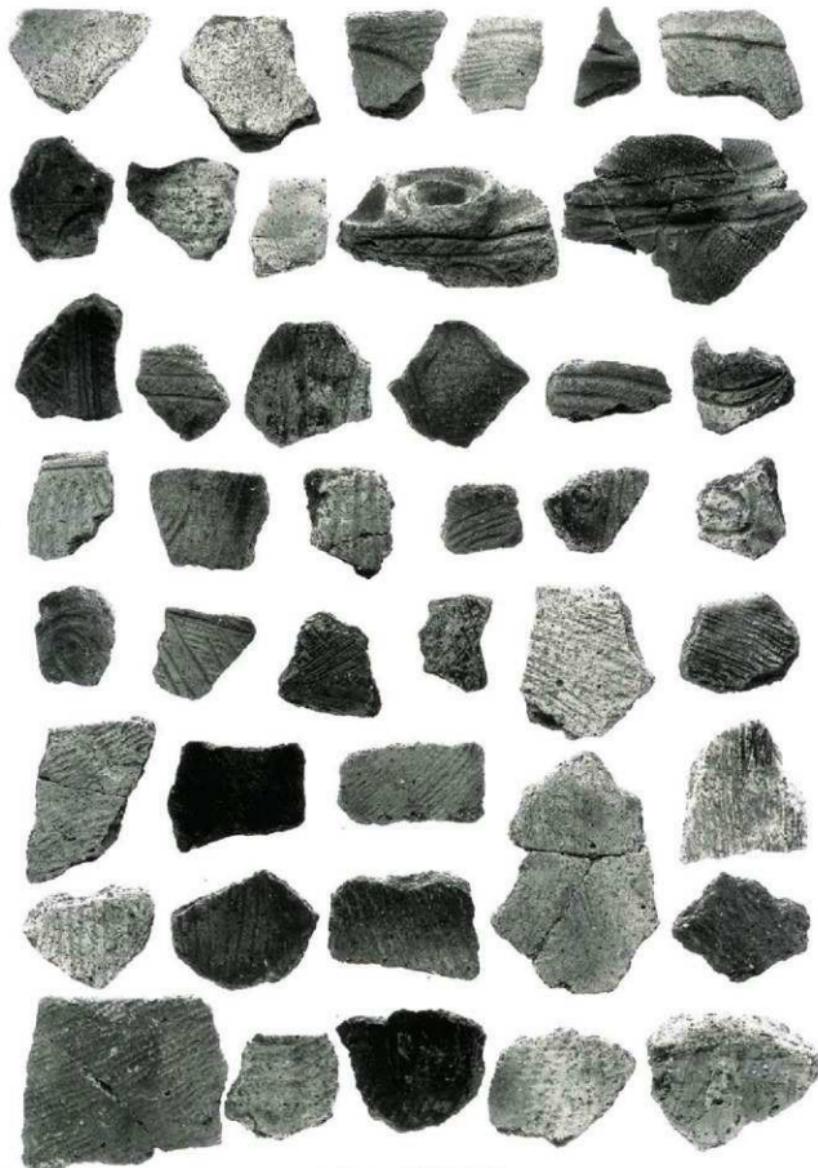
2トレンチ



出土遺物（土偶）

出土遺物

図版13 谷地寺遺跡（1）



图版 14 谷地寺遺跡 (2)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	宮遺跡の調査、問答山遺跡の調査、座須脇遺跡の調査 他							
卷次	14							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-8601 山形県長井市ままの上5番1号 TEL 0238-84-2111							
発行年月日	西暦 2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
宮	やまとたけんなんがいし 山形県長井市 とおかまち 十日町	6209	1	38度 06分 35秒	140度 02分 21秒	2005.04.11 ~ 2005.05.02	160 m ²	個人宅地 造成
小桜館	やまとたけんなんがいし 山形県長井市 とおかまち 十日町	6209	10	38度 06分 36秒	140度 02分 10秒	2005.11.10 ~ 2005.11.25	100 m ²	駐車場造 成
谷地寺	やまとたけんなんがいし 山形県長井市 くのむら 九野本	6209		38度 05分 10秒	140度 01分 30秒	2005.12.27	96 m ²	遺跡台帳 整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
宮	集落跡	縄文時代中期	竪穴遺構	縄文土器、石錐、耳栓、石籠、削器				
小桜	館跡	中世	土壙、堀跡					
谷地寺	集落跡	縄文時代中期~	土坑、柱穴	縄文土器、土偶、剥片				

**長井市埋蔵文化財調査報告書 第26集
市内遺跡発掘調査報告書(14)**

平成18年3月31日発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市まの上5番1号
TEL(0238)84-2111

印刷 株サンノー企画印刷
